



学校だより 第31号

平成24年3月23日(金)
発行者：新宿区立
新宿西戸山中学校

今年度、保護者の皆様から賜りましたご支援、ご協力に心から感謝申し上げます。来年度も更に充実した教育活動を展開できるよう努めます。一層のご理解ご協力を宜しくお願いいたします。
新宿西戸山中学校教職員一同

春やすみとけいはいつもうごいてる(幼年長・山口順子)
あてなしのペダルひばりの道に出る(中3・前川賢一)
ついてくるだいたい色のおぼろ月(中1・安部仁)
春の月につこり笑い街眠る(中1・石川智子)
一年生むかしの私とすれちがう(小4・佐藤あかり)
(金子兜太監修『子ども俳句170選』より)



今日で、平成23年度も終了します。2年生108名、1年生169名に修了証を渡しました。明日からは、2週間の春休みに入ります。「春

休み」は、夏休みや冬休みと違って、何か一仕事終えた後の充実感とともに「解放感」に包まれます。幼稚園の年長さんが、小学校への入学を目前にして少しでも早く入学式が来ないか待ち焦がれて、時計を見つめています。確かに動いているのですが、思いとは裏腹に、ゆっくり動いている、もどかしいく感じられる感覚を巧みに俳句に表しています。

高校への入学が決まった中学校3年生、受験勉強の桎梏からの解放感から当て所もなく自転車をこいで春を満喫しています。雲雀の透き通るようなきれいな鳴き声も、自分を祝福してくれているように感じられることでしょう。月もいつの間にか、冬の冴え冴えとした白色から温もりを感じさせる暖色へと徐々に変化し、夜道の道連れになってくれています。街中も、春の喜びに包まれて、穏やかに眠りにについているようです。



【本校の教育目標】

人間尊重の精神を基盤として、感謝と畏敬の念をもち、伝統文化を継承し、世界的視野に立って新しい社会・文化を創造する人間の育成を目指す。

○教養と品格を磨き、心身ともに自らを鍛える生徒〔鍛錬〕

○豊かな人間性や社会性を身に付け、自ら進んで社会に参画する生徒〔参画〕

○夢や希望の実現を目指し、自らの可能性を信じて挑戦する生徒〔飛躍〕

【4月の行事予定】

- 4/06 着任式 入学式(8:10新クラス発表)
※持ち物等は学年だより等でご確認ください。
- 4/09 第2回入学式(アリーナ 10:00~)
- 4/10 対面式(第2校時)
給食開始
- 4/13 部活動説明会(第5・6校時)
- 4/16 全校朝会・各種委員認証式 各種委員会
- 4/17 個人写真撮影(生徒手帳貼付用等)
運動会実行委員会
- 4/18 身体計測・体力テスト
- 4/19 尿検診 第1学年内科検診
- 4/20 尿検査 眼科検診 避難訓練
- 4/21(土) 土曜授業参観 保護者会 10:45~
- 4/23 学年朝会 各種委員会
- 4/24 歯科検診
- 4/25 安全指導
- 4/26 第2学年内科検診 運動会各種係会
- 4/27 離任式



最後まで充実した中学校生活 多くの教えを後輩に伝えた3年生でした

19日(月)、本校の第一期生122名の卒業生が巣立ちました。卒業式では、式が始まると同時にいから、感極まって涙を流す生徒が例年よりも多く見られました。彼らは、3年前の4月に大久保校舎に入学して以来、「あなたたちは新校の第一期生です。その誇りと自覚をもって行動しなさい」と言われ続けてきました。この1年、見事にその重責を果たしてくれましたが、精神的には大きなプレッシャーがのしかかっていたことは間違いありません。卒業式に臨み、そのことが思い出され、それから解放される安堵感も手伝って、涙を止められなかったようです。

卒業式の「別れの言葉(答辞)」では、「まだ卒業したくありません」という、思いもかけない言葉がありました。この学年は、実に団結力の固い学年でしたから、そのような思いが強いのだろうと受け止めました。また、後輩たちには、「何よりも体力が大切。陸上部の朝練習に参加して、体力をつけましょう」との呼びかけもありました。

実は、夏の新宿区陸上競技大会に出場し、男女そろって総合優勝という快挙を実現してくれた3年生の選手たちは、自分の進路が決定するとフィールドに戻ってきて、後輩たちを励ましなが、一緒に黙々と練習する姿があちこちで見られました。これは、希有なことです。3年生の思いを強く感じさせられました。



【3年生の華麗なる背面跳び】



【3年生を中心に基礎練習】

その練習は、卒業式の2日前、17日(土)の朝まで続きました。当日は、冷たい雨が降っており、練習は室内で行われていましたが、3年生も1・2年生に負けることなく、激しい練習に最後までくらいついていました。こうした3年生の姿は後輩に大きな財産をもたらすに違いありません。

卒業式での校長の「はなむけの言葉」より

皆さんに、私から最後のはなむけの言葉を贈ります。今日は、2人の人物を紹介します。「佐藤正純」と「守田稔」さんです。

佐藤正純さん(54歳)は、優秀な脳外科医で、将来を嘱望される青年医師でした。ところが、今から16年前2月、スノーボードをしている時、激しく転倒し、後頭部を強打しました。その結果、脳内出血を起こします。奇跡的に命は取り留めましたが、視力を完全に失っていました。歩行や記憶や言語など高次脳機能にも大きな障害が生じていました。佐藤さんのように、後天的に障害を負った人を「中途障害者」と呼びます。佐藤さんのような中途障害者が人生に絶望し、全てを投げ出したとしても、誰も彼を責めることはできません。しかし、佐藤さんはあきらめませんでした。事故から6年後、これから医療に従事したいと考え、学んでいる若い人達に、元患者としての立場、中途障害者としての立場から、医療従事者としての使命や心構えを教えるため、医療専門学校の教壇に立ったのです。今も医療相談員等の仕事を元気にされています。

次に紹介するのは、「守田稔」さん(36歳)です。守田さんは、まったく目が見えませんが、現役の医者として活躍されている方です。守田さんは、医学部の5年生の5月、特定難病のギラン・バレー症候群を再発します。自力で呼吸もできなくなり、集中治療室に運ばれた時には、かすかにまばたきと眼球を動かすことしかできなくなっていました。守田さん自身、この頃を振り返って「死んだ方が楽だと感じた」とおっしゃるほど、生死の境をさまよう苦しい日々を経験します。奇跡的な回復力を発揮し、2年後に退院し、医学部に復学しますが、視力を失っていました。幸いにして、その年に医師国家試験が改正され、目が見えない守田さんにも受験の可能性が出てきました。守田さんは、仲間や家族の支えを得て、2年後、全盲にして初の医師国家試験合格者となりました。現在は、奈良県の病院で精神科医として働いておられます。

卒業生の皆さんも、これからの人生の中で、様々な困難に遭遇することでしょう。しかし、どんなに苦しく、耐え難いことであっても、「Never say “can't”」を忘れず、今描いている「夢」の道が閉ざされても、新たな「夢」を求めて強くしなやかに生きていってほしいと願っています。